

学園ニュース

富山大学

NO.26

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

昭和53年3月15日

旅に巣立つ諸子へ

— いまこそ別れめ いざさらば —

文学部部長兼人文学部長 手 崎 政 男

大学の卒業式で、私はこの歌詞をかつて耳にしたことはないが、卒業はやはり別れに違いない。それはまた、新たな旅に立とうとする別れでもあるだろう。

しかし、「別れ」と「旅」とは必ずしも同質であるとは限らないようだ。少なくとも、平安時代の、特に古今時代の歌人たちにとって、旅と別れとは、それぞれ異質の、というよりは、互いに矛盾する概念としてあったと見られるふしがある。古今和歌集の撰者の中心にいた紀貫之に『新撰和歌』の著があって、そこでは、春と秋と、夏と冬と、賀と哀と、恋と雑との、いわば二律背反的な歌を組み合わせ、交互に並べて見せている。貫之の語を借りれば、それぞれを「各々あひ闘」わしめているのだ。別れと旅も、また同じくあひ闘わされている。これは一見奇異な感を与えるかも知れないが、貫之は、これらの闘いの上に「花実相兼」の理念の実現を期そうとしたのであった。

それはともかくとして、別れと旅とは、どこが異質なのか。『新撰和歌』の「別・旅」の部では、

立ち別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かば
いま帰り来む

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし
月かも

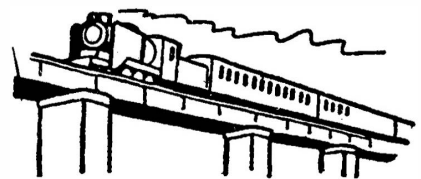
の二首がまず並挙されているのだが、前者は、古今和歌集においても離別の部にあり、後者は、同じく羈旅の部に入っている。後の歌の作者安部仲麻呂は、遣唐留学生として唐土に渡り、在唐54年、望郷の思いを抱きつつ遂に彼の地で没したのであり、この歌はそこの詠と伝えるものだ。つまり、前者には別れを言いつ

つ同時に帰ることへの期待が見られるのに反して、後者にはその期待は全く望むべくもないと言えよう。別れに臨んで交わす言葉は、同時に再会を期する言葉でもあるわけだが、旅は、帰るあてもない漂泊にほかならない。別れと旅とは、語義的に常にそうだというのではないが、詠歌の題材とするには、それが最も真実味を帯びるのであって、歌論用語で「本意」というのがそれだ。たとえば、若山牧水の

幾山河越えさりゆかばさびしさの果てなん国ぞ今
日も旅行く

は、近代感覚でとらえた旅の「本意」だと言える。

今や螢雪の功成った諸子の前に、新たに開けようとする、人生行路の、または真理探求の旅は、それが比喩の語であるとは言え、やはり、帰るところもなく、また行きつく果てもない、漂泊の道にほかならないと覚悟すべきであろう。私もまた同じく旅を続ける身であってみれば、いつかまたどこかで再会の機会もあろうが、旅そのものは果てもなく続くと言わざるを得まい。諸子よ、どうか倦むことなく、たゆむことなく、また徒らにあせることもなく、確かな足どりで各人の旅に徹せられんことを、ここに切に祈る。



ひとつの時代が終わった 新しい時代はまだ始まらない

教育学部長 坂 井 誠 一

今年も卒業の時期がやってきました。毎年このころになると、学園を巣立って世の荒波の中へとびこんでゆく若人たちの姿を、私は祈るような気持でみていますが、この一兩年はことに心痛む思いがすることしきりです。それは、このごろの世の中が、真実をもとめて進む者にとっては、余りにも悪すぎるからです。悪いというのは、不景気だとか就職難だとかを言うのではありません。長い歴史の推移をみている私にとっては、この数年は未曾有の「濁世（じょくせ）」と写るからです。私が濁世とみるのは、人々の「心田（しんでん）」が余りにも荒廃していることです。「心田を耕す」とは釈迦の言葉として伝えられていますが、簡単に言えば、心を豊かにするという程の意味でしょう。昭和30年代以降、日本は物質的にはたしかに豊かになってはきましたが、人々の心の中に、空虚で寒風が吹きすさんでいる感じです。

これとよく似た時代を、私は平安末期に想定しています。当時の人々は末法の時期に入ったと信じていました。「末法」とは、釈迦の涅槃（ひんげん）後年月を経て、釈迦の教えが通用しなくなった最悪の時期を意味します。この時期の始まりについては諸説がありますが、正法千年、像法千年を経て末法万年にふるという説が有力でした。この説によると、仏滅後2,000年、日本では平安時代の永承六年（1051）から末法に入ったと、当時の人々は固く信じていました。末法は末世を招来します。当時の文献（公郷の日記など）に「末法末世」という言葉がしきりにでてくるのはこの故です。

現在は、物質的にはたしかに豊かになりましたが、人間としての道徳律はどうなっているでしょう。釈迦は、殺さない、うそをつかない、姦淫しないなど、人間としての基本的道徳律を設定しました。私は道徳律は人間が生み出した智慧だと考えていますから、万古

不変だなどとは思っていません。現代には、釈迦の時代と違った道徳律があって然るべきでしょう。しかし現代は余りにも個人ないし集団のエゴがはびこっています。それも物質的なエゴが。

近代を引き出した要素のひとつに科学文明をあげるに異論はないでしょう。日本の場合、幕末以来、世界に遅れた近代化を進めるために、馬車馬のようにこの道を突き進んできました。明治以来日本が主導したいくつかの戦争も、このことに関わるところ多いでしょう。そしてその行きつく果ては、戦後世界中から原料を仕入れて製品を売りまくる、巨額の貿易黒字を積んで世界中のひんしゆくをかかっています。戦争によって領土を失った日本としては、敗戦の傷手から立ち直るためには、この道よりなかったのかもしれませんが。でもその反面、田園は荒れ、河川、沿海は汚染し、天与の空気すら安全に吸えない状況を引き起しています。このままでよいとは誰も思っていません。日本の近代は、行きつく所まで行ったという感じです。まさにひとつの時代が終わったのです。

「ひとつの時代が終わった」とは、一人の歴史家の、現代に対する非力なつぶやきと受けとめられるかもしれませんが。それでもよいのです。末法末世の平安時代に、最澄撰と伝えられる「末法燈明記」が書かれ、この燈明が親鸞、道元、日蓮の新宗教として燃え上りました。そして末世の時代は、素朴な農村に力強く生きる武士の支える世に転回しました。「ひとつの時代が終わった」という時代認識の中から、新しい時代の方向を見出すことができるかもしれません。

新しい時代はまだ始まっていません。現代は新しい価値観の模索時代ではないでしょうか。卒業生諸君、勇気をもって新しい時代をきり開いて下さい。諸君や諸君の子孫がよりよく生きるために。

はなむけ

経済学部長 新 田 隆 信

ことしも3月20日を以て、212人の諸君が富山大学 経済学部を単立つて行かれることになりました。その

うち96人は、最初の経営学科卒業生であります。また専攻科で一年間の研鑽にいそしんだ一人の学生にも修了の喜びが訪れました。諸君の大部分は、不況の声をよそに、就職先がきまっております、有為な職業人となって社会に貢献しようとの抱負に、心機もとみに新たなものがあろうと思ひます。世間は諸君のすぐれた器量と高潔な品性に、大いなる期待を寄せております。最終学校として本学経済学部を卒える諸君には、限りない栄光と矜持が宿り続けるであります。諸君は職場の信頼にこたえて最善の努力を尽し、母校の声価を更に高められるよう念慮してやみません。卒業の佳き日、年久しい辛勞に諸君を育くまれたご父兄にたいし、感謝を新たにして下さい、数しれぬ恩恵の故に諸君の今日があることを忘れないでほしいと思ひます。

ところで今の世は高學歷社会であり、大学出というだけでは何らエリートを意味しません。戦前の大学は、官公私あわせて48校にすぎず、官立は9帝大のほか数校の単科大学のみでした。それが戦後の学制改革により、現在すでに国公私を合せると431校に達します。そのうち国立が88、公立33、私立が310という盛況であります。大学生の80%は私立大学に在籍しますから、国立大学生は一握りの数に止まります。このほか520校に及ぶ短期大学があります。門戸開放型ないし大衆社会型の大学制度は、花咲く文化国家の燎乱を思わせますが、一面において高學歷が名目だおれの虚像に果てぬよう、不断の自戒と勉勵を怠るべきではありません。その点で、卒業日を開始日 commencement と呼ぶ

英米大学のならわしには、深い示唆が感ぜられます。自己陶冶や自己啓発への努力は、実社会の舞台で改めて開始さるべきものと思ひます。

わが富山大学は地方大学の雄であります。また旧制高商の流れをくむ経済学部は、国立十大学の一として、半世紀に余る沿革と歴史をつづり、豊かな伝統に培われ、越嶺会のメンバーとして、世人の信頼にこたえる数多くの秀れた卒業生を擁しております。学部としては更に質的水準を高め、屈指の一流校を旨し、真理を愛する高等教育の府たる使命に向つて今後とも邁進したい所存です。

諸君の赴く人生の馳せ場は、時として名利に走り榮達に焦り物質的安樂に汲々たる傾向を示すことがあります。しかしその弊風に自足せず、試練をのりこえ、世俗的尺度や価値観の上たかく、高邁な理想と崇高な目的に己れを捧げられるよう望みます。科学技術がいかに発達し、生活利便がいかに普及し、物質生活がいかに豊かとなつても、歴史を審く創り主を畏れ、人格の尊嚴と魂の不滅を信ずる心に生きて下さい。人類社会の平和的向上が揺ぎなく保たれるため、諸君各自の主体的自覚こそ「地の塩」であります。

人は自ら正しいと思つても時に過誤をおかす罪ぶかい存在であります。つねに謙つて省みる心の裕りを望みます。“To err is human, to forgive divine”. 「過誤に墮するは人のさが、これを宥すは神のわざ」と説いたA・ポープの至言を添え、餞の辞とします。

余 技

理学部長 竹 内 豊 三 郎

アインシュタインがバイオリンを弾いたことは大変有名である。伝記によると彼は友人のピアノの伴奏でもよく演奏した。物理学者で随筆家としても有名であった寺田寅彦も学生時代からバイオリンやチェロを始めて、晩年まで続けている。彼の絵は全集の扉にもなつて知られているが、昨年秋、丸善の画廊で展示されたので見る事が出来た。コピーにくらべて本物は色彩もタッチもずっとすぐれていた。ピサロの影響をうけているようであったが神経の細かさ、密度と気品の点では、随筆にも劣らないように思われて感心した。

シュワブはミュンヘン大学の老教授で、触媒化学の基礎を築いた世界の第一人者である。彼は自分の還暦

祝に自分のあゆんだ人生を詩にして友人に送つた。ヨーロッパの科学者には詩を作る習慣があるのかも知れない。化学史などによると新しい元素の発見の動機を詩で残している化学者が多いことに気がつく。日本の武将の漢詩や和歌のようなものかも知れない。シュワブが日本に来たとき、私につぎのような英語の詩を色紙に書いてくれた。私は今でも大切にしまつてゐる。

A catalyst activates molecules,
and catalysis activates friendships

サハトラーはオランダの若い第一線の学者として世界的に有名である。日本にも何回か来ているが、彼に色紙を渡したらその場で短文を書いてくれた。いま、

理学部長室にかけてあるがよい思い出になる。彼が日本を去るとき、私は色紙に立山をかいて贈ったら大変喜ばれた。彼の所に留学した若い人の話では今でも彼の机の前にかざってあるそうである。彼からのクリスマスカードにもそう書いてあった。

仕事の交流の後にこのような交流も加わると、仕事の交流も一層深めることが出来る。そのためには余技にも訓練を重ねていることが大切で、そうしないと長続きはしない、卒業と同時に余技を止めてしまう人が多いが、忙しくても続けるべきである。

機械はひとが使うもの

薬学部長 柳 田 友 道

近代化社会における職場、特に理科系学部卒業者が出向いてゆくような職場では、しばしば思いもかけない事故が発生することがある。何が主たる原因か。人を相手にする薬学部卒業生諸君はこの問題をじっくり考えてみてほしい。諸君はこの4年間、次々に新しい学問なり技術なりを習得してきたので、その一つ一つに慣れるということにはなかったろう。しかし一旦社会に出れば、一つの職場での仕事は多くの場合、誠に単調で、同じような仕事を毎日毎日繰り返さねばならない。例えば薬局での仕事を考えて見給え。最近の普通の薬局では、処方箋に従って分包の数を数え、錠剤の数を数えて袋に入れるといった単純作業の繰り返しが日常行われている。薬局に就職したての時は誰も絶対に間違えないように、一生懸命やるに違いない。しかし数か月経って慣れてきたときが怖いのである。自動車の運転にしても、統計的には免許証手得後1年位経過した者の事故が最も多いと言われている。

慣れは慣れでも、はじめから無意識な、より本質的な慣れが、現在のように近代化された職場で横行している。それはコンピューターとか斬新な測定機器や作業機械などを常時相手にする職場ではびこっている。こういった機械はスイッチを入れてノブを廻せば答が出たり作業したりしてくれるのであって、それら进行操作する人々の慣れというよりはむしろ機械に対する無批判的な過信が問題を起こすのである。機械によっては目盛盤の上を針が動いて答えを出すのと違って、ずばり数字で解答してくれるデジタル式のものなどもあり、これを使っていると誠に安心感があるような気がする。しかしこのような便利な機械も本当に使いこ

なすのはむずかしいということを知っておいていただきたい。いま卑近な実験道具をみてみよう。今のpHメーターは電極を溶液の中に浸すだけで答えがでてくる。しかし学生達のやるのを見ていると、大量の溶液の底の方だけマグネティックスターラーで攪拌して、酸かアルカリを加えながら上部に電極を突込んで測定したり、ガラス電極を蒸留水中に長い間浸しておいた間に、電極の周囲に細菌がぬるぬるに生えているのも知らずに平気で測っていたりで、私もこれまで何回学生を叱ったか解らない。機械はいくら簡単で立派でも、少しは頭も使わねば正確な答えは出てこない。

最後にアメリカの病院で起こった恐ろしい事故を紹介しよう。最近大病院の中央検査室では、患者から分離した病原菌を検査するのに実に簡便なキットが使われている。分離菌を何種類ものテスト紙上に短時間培養して、いろいろな反応の陽性陰性を観察し、その結果をコード表で検索すると、一辺に菌の名前がわかるというしろものである。これを使って菌を検索するには従来の面倒な方法も時折併用して、キットの正確さをチェックすることになっているが、アメリカのある病院で、長期の慣れ(キットの答えの正確さに対する過信)の結果、思わぬ事故が発生した。それはキットで出てきた答えはビブリオ腸炎菌(食中毒菌の1種)だったのだが、どうも病状や伝染性などから様子がおかしいので、遅ればせながら別の所で検べたところ、ペスト菌だったというのである。その後の騒ぎが思いやられる。

ひとは酒は飲むもので飲まれるものではないとよく言う。機械や道具もひとが使うものであって、これに使われたり振り回されたりしては滑稽でさえある。

祝 御卒業

工学部長 室 町 繁 雄

「鶏頭となるも牛後となるなかれ」という伝えがある。今日のような就職難の時でなくても、大企業に就

職し大樹の蔭で生涯を送るより、中小企業で存分に活躍する方が、どれだけ生きがいがあるか知れないと思う。それには一つの勇気、決断が必要であろう。しかし私は、特に今日のような時代にはそれを望みたい。ところが仲々その方向に進んではもらえない。

そこで一方、幸福とは何ぞやと考えて見たい。県外には専門を生かせる職場があるにも拘わらず、自宅から通勤出来ないという理由で就職をしない。はじめは何のために大学を卒業したのか疑問に思わざるを得なかった。しかし、都会に出てあくせく働いて、やっと

我が家を作ったら停年、一方、自宅から通えば生活費はいらない。呑気に一生を送れる。どちらが幸福であるのか、私には分からなくなった。青年よ大志を抱けという言葉は、今では通用しなくなったのだろうか。

とにかく御卒業お目出とうと云いたい。各人如何なる職を求めて散ってゆくであろうか。今後の活躍を期待しながら、10年先20年先を見守りたい。鶏頭となるか牛後となるか、どんな幸福な家庭を築きあげていることか、とにかく一生のおつき合いだからなあ。

◀◀ 昭和53年 4 月 1 日付退職者 ▶▶

教育学部 教授	玉 生 正 信	教育学部 教授	高 野 兼 吉
〃 〃	入 沢 寿 夫	経済学部 教授	野 崎 富 作
〃 〃	蔵 島 茂	〃 〃	菅 原 修
〃 〃	深 井 三 郎	人文学部 教授	森 谷 佐 三 郎

思い出すまに

教育学部 玉 生 正 信

大学発足以来、大へん長い間いろんな多くの方にお世話になりました。ふり返ってみますと、今日までかなりの迂余曲折があって、漸くここまで辿りついたという感じもします。

教育とはどういうことなのか今更ながら思ってみても、これに明快な答えはなかなかえられないようにも思います。人間の感性とか感情とか身体の運動というようなものが教育の中で重要なのに、それを無視しているようにも思います。

もちろん、何かについて知ることも必要です。でも今日の社会では何かについて知ることと、何かをよく感性で知ることのバランスがとれなくなって、いろんなことを知っているようだけれど、実は何も知らないようなことがあるのではないだろうか。

フランス語で「サポワール」と「コネトル」という言葉があります。これは両方とも知るという意味です。

前者は「～について知る」という意味で、後者は「よくしたしむことによって知る」ということです。現在の教育は「サポワール」ばかりになって、「コネトル」がだんだん無視されています。もっと「コネトル」というものを大事にしなければいけないという考え方が、イギリスやフランスでもまじめに考えられているということです。

なにごとにも機械化されて、自分で作るという仕事が無くなってきている機械化の時代に、こんなことをいうのは随分まのぬけた人間のようにみえるかも知れません。人が考えた結果ばかりたくさん知っていても、それは思考力とはならない。

思考力というものは現代に必要なものですが、これは人間の感性や技術というものに根を張ったものでなければならぬと思います。

このようなあまり実りのないようなことを書きました。

御 挨拶

教育学部 蔵 島 茂

多くの心ある方々の御指導・教え・励ましを頂き参りましたことを、ただただ感謝致しております。

厚く御礼を申し上げます。

学生諸君には雪中の松柏の気概をもって、自己を錬磨されんことを希望します。

いつの世にも言われていることかも知れないが、現

代はまさに大きな変革の時代であろうか。

表面の現象だけに眩惑されることなく、本質的なもの、底にあって現実を動かすものを研究しなければならないと思います。そしてそれらを全体的・総合的にとらえることは殊んど不可能または至難事でしょうが、しかし、小生は学生諸君の不動心と研究心に期待し、希望したい。

小生の感懐を附加させていただきます。

この度の大戦—もう既に30数年を経た—への思いは消えない。しかもその後の世界・人類社会は危機の相を質量ともに深くしていると思われま。

人の言うこの末法の世を転ずるものは何であるだろうか、何々であるべきだろうか。はたまた弥勒の世をまで待ち願うべきだろうか。

皆々様の御健勝を祈り上げます。

回顧と反省と

教育学部 深井三郎

私が五福で講義をするようになったのは、進駐軍が引きあげ、師範学校の男子部と女子部の敷地と交換が終った後であった。その頃焼け残った旧歩兵第35連隊の第一大隊第一中隊の兵舎と連隊本部と、別にその東側に厩屋が並んでいた。広い校庭であった。私にとって、こゝは17年前の短期現役兵として入隊した夢の跡でもあった。その後、つぎつぎと各学部が移転してきた。なんだかはじめ自分たちの屋敷の中へ無断で建物ができたと気がした。そして現在のように将棋の駒を並べたように校舎がならんだ。あれから30年—早い月日の流れであった。この間、多くの方々に御世話になった。厚くお礼申し上げたい。

昭和27年頃から私は県に建ててもらった理学部のうちの平屋の地学教棟にいた。何もかも不足であった。この教棟にいた間の夏休み、期末休みだけでなく、ほとんどの日曜日は、私はハンマーを持って山や川を歩るき廻っていた。苦しかった時期であったが一番なつかしい。今日の校舎に移って少しずつ施設がよくなるにつれて更に備品の不足を言うようになった反面、以前より研究の方はすまなくなった。人間とはおかしなものである。

この間、多くの学生が希望をいできて校門をくぐり、そして卒業して行った。私は教えながらも多くのこと

を学ばしてもらった。

そして、嵐のように学園にいまわしい紛争がおこった。一部学生の単細胞的な飛躍的な論理の饒舌、権利だけの一方的主張、暴力と破壊的行動は話してわかるものではなかった。これらの学生を含めて学生諸君の心にすき間を与えるものは教育の場になかったのであろうか。その反省が改革への試案であった筈だったが、それはすべてが無駄なエネルギーの浪費だったのであろうか。今、学園は正常に復し、どこの学部もその目標に従って充実への希望をいできておられる。その発展を祈りたい。

私は自分の足跡をふりかへて見て、至らないことが多かったけれども誠実に信義だけは貫き通したつもりである。

最後に一言といわれるなら、大学・学部の発展の根底にあることについて、それは余計なことであり、良識的に明らかなことであるとは思いますが、その良識を具体的に広くお互いのものとし、落ちついて教育と研究に従事するために、大学設置基準の第13条とくに第2号について各学部でのそれぞれの解釈ではなく、大学として統一的な見解を持つことが必要ではないかということである。

大学改革に心残り

教育学部 高野兼吉

大学職員も学生も、さらには大学周辺の社会人も、富山大学の望ましい姿、正しい姿を追求して日夜努力しているのだが、思うにまかせないのが改革である。大学には改革すべき多くのものを残しているのだが、

いろいろな要因によってそれが阻まれている。一例を工学部移転問題に取って見ても、開学以来の懸案がいまだに未解決である。昭和45年頃の大学紛争は全国的な規模であれだけ大きなエネルギーを消耗したにも拘

らず、どれだけ成果をあげたか。少なくとも富山大学ではこれと言って取り上げられるものはない。富山大学改革委員会を組織して、熱心に改革を論じ、答申書まで作成したのに、これに直接こたえる形で何ひとつ改革されていない。薬学部の分離や文理学部の改組は大学改革とは別の次元でなされたと見られる。

学部の増設・改廃など対文部省交渉にまたねばならないものは別として、大学内で、あるいは学部内で可能な改革もある。また学部内で一致した意見があれば、それを提げて文部省と粘り強く何年交渉でもする手もある。ともあれ、大学はその清新さ・若さを保持するために改革を志向しなければならない。

先般の大学紛争でも改革の震源地は若い助手層にあった。大学教官の若年層が大学機構の現状をどのように見、どのように改革したいと考えているか、そしてそのエネルギーがいかにかう積しているかがよくわかる。これに対して老教授連はいかに対処したか。一般に老教授は保守的である。しかし永年、改革を望んできた人ならば、いかに老教授と言えども、一応の改革意志を持っている筈だ。それを若年層へ伝えねばならない。もちろん若年層はそれを承け、時代感覚に合せながら変容し、修正していくであろう。かくしてこそ改革の火は消えず、大学は清新さを持続するであろう。

富山大学においては当面、大学院設置問題が中心に

据えられるであろう。工学部では移転問題、教養部では学部への転換問題があって必ずしも歩調が揃わないかもしれないが、大学院設置問題は一応の共通問題と言えるし、教官の研究を促進し、大学を質的に向上発展せしめる捷徑と言えるであろう。従って富山大学は当分の間、大学院問題をめぐって動くのではないだろうか。

新制大学29年の歴史に照らして、大学4年の課程では学生に深みのある研究を期待するのは無理である。専門課程二年半では、期間が余りにも短い。この二年半に更に2年を加えて一連のものにしたら、いい結果になるかと思う。アメリカのハイ・スクールやドイツのギムナジウムに比して、日本の中学校と高等学校の間に切断があり、入学試験が課せられるのは大きな短所であり欠点だと思う。もし大学学部と修士課程の間に同様な切断があり、入学試験が課せられたならば、やはり大きなロスが生じるのではなからうか。入学試験は一部の者をより強くする絶好の試煉であるが、大部分の学生・生徒に過酷である。従ってそれは多くの弊害と犠牲を伴なう。教育政策としてはその回数を削減する方向がよいのではないか。

何と言ってもわれわれは健全な大学院が育つことを希望する。小異を捨てて大同につき、一日も早くこれを実現したい。腰を落ちつけてじっくり準備するのだから「早く」実現することにならないであろう。

まとまらぬ話し

— 定年退官を控えて —

経済学部 野 崎 富 作

ある新聞によると此度本学を定年で退官する教官は8人、森谷教授を除いた7人は母親の胎内に宿ったのが明治、娑婆に出た時は大正だったとか。従って小生も多数派、しかも10月15日生れたから月の前半最後の日に、長男として生をうけたのである。又教師生活44年の内きっかり半分、22年間富山大学に勤めた事になる。明治、大正と二つの時代にまたがるとか、月の前半最後の日に長男として生まれるとか、奇妙に終りとか始めに縁がある。過渡期に生きて流される運命を背負ってるのかも知れない。すべて過去を振り返って勝手な解釈をするのかも知れないが、これに類する事を次次に経験する。

中学に入ったのが大正14年。15年が昭和元年だから事実上大正の終りである。又、恥ずかし乍う私は東京

商大附属商業養成所を2回受験している。一回目が昭和5年、神田一つ橋の旧校舎で入試が行われた最後の年であり、2回目の昭和6年からは国立の新校舎で行われている。この頃は不況のどん底で卒業後就職確実な学校へ志望者が殺到した時代である。かくいう私も、卒業したら文部省の指定する学校へ勤める義務があるというので志望したのである。「一つ橋大学年譜」によると、昭和6年の本養成所の競争率は空前の高率、定員35名に対し志望者606人であった。なお私はもう一つ、横浜高等工業附属工業教員養成所にも願書を出していたが、結局横浜へは受験に行かず学科試験の結果が判明する迄、一週間ばかり「東京見物」をしていたのである。呑気というか馬鹿というか、今の人達には理解できないかも知れない。入学して半年後、井上準之助蔵相は緊

締政策実行の一端として、予科及び商学専門部の廃止を企てた。これに対し東京商科大学の全教官学生は挙げて反対運動に立上り、学生は神田一つ橋の旧校舎に立籠った。一橋学園史に残る「籠城事件」である。この運動が効を奏してか井上蔵相から存続の言質を取り問題は収まったが、街頭デモで警官隊と揉み合い、踏みつけられた警官のサーベルが飴のように曲ったのが今でも眼前にありありと浮ぶ。

卒業の時は相変わらず就職難で文部省は義務年限を免除するから好きなようにしてくれという。みんな憤慨したが採用してくれる学校が少ないのだから仕方がない。実業界に入った者もいる。私は秋田県立能代中学に採用され、4年程で宮城県石巻商業に転じ、それから一年後再び母校の学部に入學した。学部卒業は昭和16年12月で卒業論文は灯火管制下で書いた。始めて修学年限の短縮された年で翌年からは9月卒業となった。この2年9カ月が、省みて私の一生で一番平穩で勉強した時期である。5年間教員をやったので学資は充分あり、時には旅行もした。

学部卒業後、大阪府の堺商業に約1年半勤務、昭和

18年6月大連高等商業学校に赴任した。任地は時あたかも「アカシヤの大連」であった。敗戦後の大連はソ連によって管理されたが、私は縁あってソ連が接収した企業（旧満洲油脂大連工場）のグラウニ・ブッハルテリヤ（会計の執行機関と監査機関を兼ね備えた職位）となり、引揚げ直前まで勤務した。私の上司はディレクトル（企業長）1人だけ。しかも会計上では彼を牽制する権限と責任をもっていた。簿記や原価計算が各国共通の計算制度である事を身をもって体験したのである。日本人の通訳が2人いたので、読み書きは彼等がやる。私は耳と口だけのロシア語。文法は知らず、発音も悪いが文字を知らないのが強味？で、一番容易に口から出る外国語は今でもロシア語である。

与えられた紙面もなくなったので此辺で終りたい。肝心な富山大学在仕中の思い出話しが出て来ないが、既にメ切期日も過ぎ、書き直す時間もないのでご勘弁願いたい。22年もの長い間、大過を犯しながら月給を頂いて来た事は慚愧に堪えない。教職員学生の皆さんには公私とも迷惑ばかり掛けて来た。心からお詫び申上げると共に深く感謝の意を表する次第である。
(2月26日 零時半)

越 山 頌

経済学部 菅 原 修

富山はいいところだ。ここで20余年が過ぎた。

山は美しく、水は清く、魚は新しく、そして米はまたうまい。公害のデパートと人は非難するけれど、この水に、この魚に、そしてこの米に人命を断つほどの「毒」があると、誰が信じようか。

富山の気候は悪いといわれる。過去には「イギリス病」患者が多く出た。たしかに雨が多く、雪もまた多い。その勢は激しく、時には山を削り、人家を倒し、人命を断ったことさえもあった。だが、この雨と雪とがなかったら、現在の繁栄はなかったのではないか。殊に植物の培養に興味をもつものにとって、この湿った空気とやわらかな陽光とは、この上ない恵みだ。

富山の人は利に敏く、排他的だともいわれる。私はそうは思わない。私の一族は長くこの地に住んでいたし、一時私が禄を食んだ安田一族もここから発祥している。そうした例からみても、この非難は当たらないように思う。ここの人々は皆親切だ。

私は富山が好きだ。富山の地に骨を埋めたいと思う。富山大学の校舎は大きくなり、研究資料は次第に整

備されてきている。だが、私が移ってきた頃は、財政学関係の資料は皆無に近かった。これは「エライ」大学だと感じた。しかし、貧しいことは幸いだったともいえる。数年間はジョン・ロックの『全集』(1759)を読むことに明け暮れた。また、H・G・ブラウンの『租税の経済学』(1938)を繙くこともできた。ロックからは、財政民主主義と租税転嫁論の原初形態を学ぶことができた。またブラウンは、租税分析における「一般均衡分析」の必要なことを教えてくれた。これらは、その後における私の研究を方向づけるのに大いに役立った。いまでは、財政学の基本的資料はほぼ揃っているし、研究しようと思えばどこからでも手をつける状態になっている。この20年間は、資料整備の年月だったともいえようか。

大学の蔵書に「ヘルン文庫」なるものがある。利用する人は少ないと思うが、私はこの文庫に限りない関心をもつ。若気の至りで、その昔、海後宗臣教授（東大）の指導を受け、ハーバート・スペンサーの『教育論』の研究に打ち込んだことがある。スペンサーの進

化論的哲学がヘルンの作品の背景にあることを知った。またその進化論的教育思想が、アメリカを経て、戦後の日本に花を開いていることは、既に周知のことだ。

私は教育学も教科教育法も知らない。いふなれば、教育については「ズブ」の素人だ。しかし、過去に取り組んだスペンサーの教育理念が、私の現在の教育方法——そういえるならば——のなかに生きているようにも思う。スペンサーの研究につながる意味で、ヘルンの作品と蔵書とに限りなく親近感を覚える。昨秋、数日を松江で過ごし、ヘルンの事蹟を尋ね歩いたのも、こうした「縁」につたがるゆえんか。

最後に、学生諸君に望みたい。大学を「大いに学ぶ」意味での大学にしてほしい。校舎の大きさや資料の豊富さもさることながら、大いに学ぶことなしに大学はありえない。アルバイトもよい。麻雀もパチンコもよい。あるいは恋愛に耽けるのもよからう。だが、学ぶことだけは忘れてはなるまい。いまや富山大学は「駅弁大学」ではない。秀れた研究者が雲集している。これらの先達に教を乞わないというてはない。

富山と富山大学とを、私はこよなく愛する。そこで教え、そこで働き、そこで学ぶ人々に、永遠に栄光あれと祈る。

別れの言葉

人文学部 森 谷 佐三郎

シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』の中にブルータスがキャンアスに別れを告げるところがある。

If we do meet again, why, we shall smile;
If not, why then, this parting was well made.
(もしまた会えたなら、そうだ、たしかに笑おうなあ。
もし会えなければ、そうだ、ちょうどよい別れであった。)

私はブルータスを気取る者ではない。またフィリッパの戦場に赴く者でもない。ただブルータスの言葉を借りて別れの言葉としたい。

(もしまた会えたなら、そうだ、たしかに笑おうなあ。
もし会えなければ、そうだ、ちょうどよい別れであった。)

新 任 教 官

- 油井 雄二 助手(経済学部) 53.1.1
昭52. 3 一橋大学大学院経済学研究科博士課程
単位修得
担当: 財政金融論
- 桂木 健次 助教授(教養部) 52.12.16
昭45. 3 九州大学大学院経済学研究科修士課程
修了
担当: 社会環境論
- 小島 覚 教授(教養部) 53.2.16
昭47. 5 カナダブリティッシュコロンビア大学
大学院植物学研究科博士課程修了
担当: 社会環境論

- 御影 雅幸 助手(富山大学和漢薬研究所) 53.2.1
昭和50. 3 富山大学大学院薬学研究科修士課程修
了
担当: 資源改発部門
- 谷村 急徳 教授(薬学部) 52.10.1
昭36. 2 東京大学大学院化学系薬学専門課程博
士課程中退
担当: 薬品分析化学
- 田中 克志 助手(経済学部) 53.2.1
昭52. 3 神戸大学大学院法学研究科博士課程単
位修得
担当: 民法

富山に来て

経済学部助手 油 井 雄 二

昨年の暮から何回か富山に来ましたがほとんど雪も降さず、「山と雪の富山」という私のイメージがくず

れる感じでした。しかし、こちらに引越してすぐに70cmほど雪が積もり、やっとイメージ通りの富山になり

ました。もっとも立山連峰は雲にさえぎられていることが多く、まだ十分眺めていませんが、研究室の窓から時折顔をのぞかせるその雄姿は、さすが山の国という感を抱きます。

雪を憎むは雪国に生まれた人の悲しさ(?)とか聞

きましたが、東京で生まれ、育った私にとって雪は遊びの対象であり、雪が降ると浮き浮きとした気分になります。このような気分がいつまで続くかわかりませんが、独身の気楽さをフルに利用してスキーと山歩きにも挑戦したいと思っています。

新任のことば

教養部助教授 桂 木 健 次

昨年暮に博多(九州)から来ました。皆さんのお話によると今年の冬は例外的にあたたかで雪も少いとのことですが、中学入学以来九州を離れたことのなかった——旅行を除くと——私には、この程度の積雪にもややへいこうしております。なにしろ長靴が重たくてすねの筋肉はこりっぱなしですし、夜行性動物の私にはこのとてつもなく長い夜の時間にたいくつしてしまい、狭いアパートの中で息子とケンカばかりしている調子です。

しかし、他の土地から来られた方みんながこうした順応するまでの生活サイクルの微調整を必要とされたと思ひ、自然との調和のとれたこの土地の環境の中で、

じっくり研究と仕事にとりかかりたいと思っております。

私はもともと経済思想史——「ロマン派経済思想」(シスモンディ、ナロードニ Chestov) の再検討——が専門であります。そこに流れるテーマが効率と公正の均衡論でありますので、この数年はもっぱら社会環境論(「地域開発」)の仕事にとりかかってまいりました。こちらでも、都市化(人口)と環境保全、農業と工業の均衡に基づく地域開発の像、福祉型経済——産業構造への組み替えにかんする現実的テーマをおいつつ、過去の諸学説の再評価の中から先人たちの残した思想的蓄積を捕捉したいと考えています。

新任にあたって

和漢薬研究所助手 御 影 雅 幸

大阪で生まれ育った私は、冬型の気圧配置すなわち西高東低は観念的に異常乾燥注意報の出る快晴とばかり思っておりましたが、北陸へ来て全く逆であることに最初はとまどったものです。しかし慣れると冬の北陸もまた楽しく、長く続いた曇天のわずかな晴れ間に、研究室の窓から望める屹立した立山連峰には何か心を奮い立たされるものを感じます。

薬の県として名高い越中富山に和漢薬研究所が設立されておりますことは誠にふさわしいことで、研究所内の各部門では和漢薬に関する諸問題の究明に尽力されております。私の専らの研究は和漢薬の品質に関する事柄で、とくに個々の生薬の基源を明確にするという点に重きを置いております。生薬はその歴史が古く、また天産品であることなどから、現在に至る迄に種々変遷があり、その結果異物同名品が多く、果たして正品は何かとなると明確に答えられないものも数多く、このことが未だに漢方が正しく認識されていない一因ともなっています。漢方処方による健康保険診療が可

能になった今日、漢方処方中に配合される個々の生薬の基源を明確にすることは急務であり、本草学、市場調査、比較組織学、天然物化学などの手段による地味な研究ですが、やりがいのあることです。また最近当研究所にX線マイクロアナライザーを装備した走査型電子顕微鏡が設置され、生薬分析の新しい方向を見出すべく意欲を燃やしております。

これからは薬の富山という地の利を充分活かしたユニークな研究を押し進めたいと考えております。諸先生皆様方のよろしき御指導御協力をお願い申し上げます。次第です。



新任にあたって

薬学部教授 谷村 急 徳

昨年の夏富山大学に来ることに決って富山駅に降りた第一の感想は、空が広いということでした。道巾も広く、神通川の水量の多さにも印象が深かったことです。大学のキャンパスにも広い道と、広い空がありました。東京で生活していると、空との境はビルの屋根であり、稀に山の見える時もその稜線よりも、その間に在る家々の多さの方が目につくのですが、ここでは建物でさえも、わずらわしさを感じさせません。

富山というと、なんといっても越中富山の薬屋さんが私には一番先に思いうかびます。その富山の薬学部で働くことは不思議な気がします。

最近世上では薬に対する責任的な評価よりも、否定的な評価が多いように思われますが、言うまでもなくお酒でもそうであるように、薬には良い面と悪い面があります。そしてこのことは殆んどすべてのことに言えることであり、良い面と悪い面は一体のものである

ことが多いように思います。薬には昔から匙加減という言葉があり、匙加減の上手な人が名医といわれる訳です。

これから私が担当する分析化学は、この匙を作る分野ではないかと思えます。正確な匙、使い易い匙、何度でも使える匙、早く測れる匙は勿論必要ですが、更に進んで新しい種類の匙、又更には何に使うのか判らないけれど、作ってしまうと何を測るのか判って来るような匙を作れば仕合わせだと思います。まだ無い種類の匙や、まだ測られていないものを測る匙は、そこに匙が必要かどうか意識に上らないという点で、極めてみつけにくいもののように思えます。又必要であっても到底作れない匙かも知れません。しかし、こんな匙を作れば仕合わせだと思っています。皆様の御支援をお願いします。

富山雑感

経済学部助手 田中 克 志

大阪発の夜行列車降りた時から、富山駅は雪の中…が富山赴任の第一日目（2月3日）。覚悟はしていたものの、この光景にはびっくりした。しかし、夕陽に映える立山連峰は、山にとりつかれている僕の胸を躍らせる。そこで、冬は、スキー、夏は、北アルプス登山と、気候と地形をフルに利用しようというのが現在の心境です（どうも、僕の家は、母校の「大学院山の

会」の中継基地になりそうです）。

今のところ、富山と奈良とを飛び廻っているのだから落ち着かないけれど、広島に生まれ、大阪、岡山、東京、大阪、奈良と流れ歩いてきた僕に、また新しい故郷ができたわけです。そのうち、大阪弁を喋る富山県人として大学構内を、そして富山市内を闊歩していることでしょう。

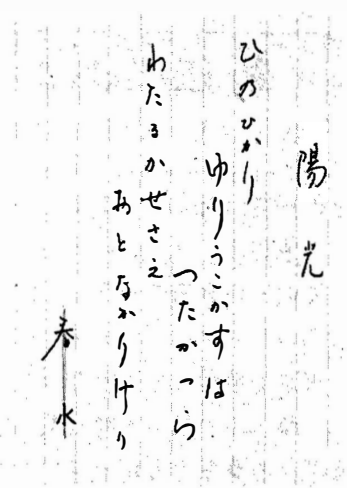
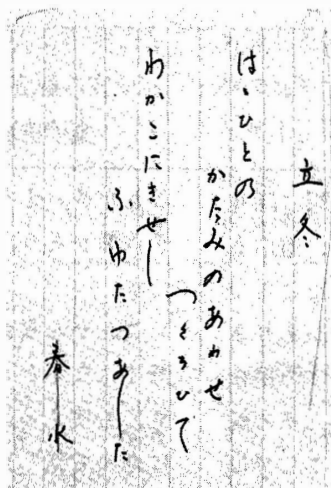
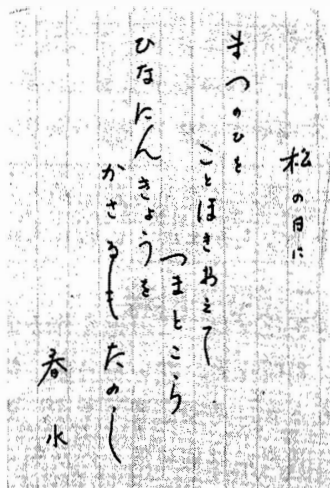
光
おののしらゆき
ゆるゆりにゆる

あらたまの
ひかりあふる
うきすなまの
ゆるあまきあま

あらたまの
よすけきいのる
こころあらたに

あまの
あけなかりり
あらたまの
春水

新春歌選



(白河春水, 工学部教授, 電子工学科, 基礎電子講座, 量子工学担当)

学生部だより

一新樹寮の水道料負担区分問題解決

新樹寮の水道料負担区分問題については、前回の学園ニュース(52年9月26日, No.24)で、9月12日までの経過の概要をお知らせしたが、その後も、学寮補導委員会を2回(52年3月以降6回)、寮生との話し合いを10回程(52年3月以降約30回)続けた結果、11月30日にいたり「生活用水としては大学側40%、寮生側60%の割合で負担する。4月以降も話し合いを継続して行く」ということで問題の解決をみるにいたった。

(注. 洗車用水については、現在、水道栓を止めている。)

学生部としては、炊事・入浴等の生活用水を止めざるを得ないような事態に至らないように、平素から寮生との話し合いの中で円満に解決して行きたいものである。

寮生諸君も、現実をよく見極めて、学寮補導委員会の意見を尊重し、話し合いが徒らに平行線を辿ることのないように努力することを期待したい。

最後に、今回の水道料問題の解決にあたり、いろいろと御指導、御協力いただいた各位に心より感謝の言葉を申し上げ、今後もよろしく願いいたします。

一日本育英会奨学生にお知らせ一

昭和52年度奨学金の受領について

昭和53年4月から奨学金の交付方法が銀行口座振込

方式に改められますので、3月分までの奨学金を3月末日までに受領しない者については、4月からの奨学金の口座振込が保留になりますから全員必ず受領して下さい。

一学生証の査証について一

1, 2, 3年次生は、各学部、教養部の学務係で、昭和53年度の査証を行いますので必ず受けてください。なお、査証を受けていない学生証は無効となります。

一昭和52年度体育系サークルリーダー研修会終了一

本年は立山山麓錦秋の粟巣野の地、山野スポーツセンターを会場として実施され、晴天に恵まれ、厳しさの中に和気あいあいとした研修会であった。

●実施概要

期 日	昭和52年11月26日(土)・27日(日)1泊2日
場 所	富山県上新川郡大山町山野スポーツセンター
研修生	体育会役員及び運動部リーダーの学生80名
講 師	学生部長 岩淵富治 教養部 教授 有沢一男 教育学部 助教授 中川 孝 " " 山地啓司 " 講 師 横山泰行

研究項目(主として)

1. リーダーシップについて
2. クラブという集団の意味について

講 演

- I 効果的な基礎トレーニング方法(山地教官)
- II 障害時の応急処置と障害防止措置(横山教官)

リーダー講習会に参加して

合気道部 吉田 利行

師走も真近の11月末日、日頃各クラブにおいてその屋台柱になっている主将及び主務の面々と、体育会の役員・学生課の方々や教官の方々の御同行のもと、山野スポーツセンターにおいて、それぞれ主将・主務の役割とか、クラブとはどういうものかについて各方面の方々の意見も交え討論しあい、また日頃接触の薄いクラブ同士の親睦を計るべく、この会が行われた。

最初センターについた時、皆緊張して少々堅くなっていたが、分科会の時には活発にかつなごやかな雰囲気でお話がかわされていた。やはりクラブの中心たる面々、いろいろ悩みや苦勞が多いようで、話していくうちに他人の苦勞話に自分もそのようだとやんばかりにうなづく人が多く見うけられた。軽率なようだが、この時すでに、私はこの会に参加してよかったと思った。同じ悩みをもった若者が集い、討論しあう、これだけでもよいと心底思った。

夕食後、トランプに興じたり、談笑したり旧知の知己のようにみな楽しんでた。

その後の講演では、体育科の先生によるトレーニングの方法についてのお話があった。

みんなクラブへ帰ってのトレーニングなどについて、先生に質問する人が絶えなかった。

翌日は、各分科会において、クラブというものについて活発に意見が交された。その後、体育科の先生によるテーピング法の実習があり、みんな実際にテーピングをしながら、スポーツ事故の防止についてお話をうかがった。

それから、レクレーションとしてソフトボールを行い、学生課の方々と交え、皆白球を追っていた。特に学生課の方々の奮闘が、目立ったようである。

帰りのバスの中でも皆で歌って笑いのたえない楽しいものであった。

今回は、1泊2日と期間が短く、時間的余裕にもかかわらず、分科会、講演と立てつづけに行われ、もっと深い各クラブのお互いの親睦がえられなかったのは誠に残念であった。

なお、この会の開催に当たり、いろいろと心を砕いてくださった学生部長先生を始めとする学生課の方々体育科の諸先生方に、心から感謝の念を申し上げ、またその先生方の御苦勞に答えるべくこの講習会で得

たものをサークル活動に反映し、力一杯やるのが我々の責任であると強く痛感した。

●「白銀は招くよ」スキー講習会終了

本年度のスキー講習会は、去る1月7日から13日までの1週間にわたり、雪のない富山平野から、白銀は招く志賀高原ブナ平スキー場を中心として行われた。

スキーを履くのが初めての初心者から、スキーが足のような上級者までがそれぞれの班に分れて、自らの技術の向上に熱心に取組んで、1日おきの猛吹雪をも克服し、心配された怪我人もなく多大の成果をおさめ終了し得たことを、指導教官、体育会の諸君並びに関係各位に深く感謝します。

「スキー講習会雑感」

10班 経済2年 原馬 宏之

今回のスキー講習会に参加して、一番すばらしかったことは、スキーの魅力を存分に味わったことであろう。よく、ある程度スキーができる人は、シーズンになると、初対面の人には、「あなたは、スキーができますか」ときくのだそうである。これは、スキーの魅力を知ってほしいためで、私もその一員になれてうれしいと思っている。やはり、最も豪快でスピード感のあるスポーツは、スキーであると思う。

ところで、実際、志賀高原へ到着すると、あたり一面は、銀世界であり、ここは、日本のスキー場のメッカだけに、設備もよく、雪質が抜群なのである。我々は、ここでスキー講習を受けたのである。私は、初級班の10班なのだが、恥かしながら、10班のエースであると自負していたのである。しかし、エースもだらしなく、よく転んだような気がする。不思議なもので、他人が転んだのを見て、今度、自分が優越感にひたりながら、格好よく滑ろうとすると自分も必らず転んでしまう。さて、今回の講習会で印象深かった点をあげてみると、まず、寺小屋スキー場の林道である。この雪景色は、最高である。わが班のある女の子が、林の中に突っ込んで泣きそうな顔をしていたのが印象的だった。この辺には、上級のスキーヤーがやって来るのだが、女性のすばらしい滑りを見てみると、むかつきがこみ上げてきて、かつ、自分が大変みじめに思えてくるのである。次に、ジャイアントスキー場である。ここは、最大斜度40度ぐらいで所々に岩が出ている。

我々、初級班では、最難関のコースである。全く、滑っているというより、飛び降りているような気がした。何回も転びながらも、無事に降りてこれたのは、幸運であった。さて、我々は、毎夜時には指導教官も交えて反省会を開きスキーのこと、その他のこと等でも討

論し、友好も深められて有意義であったと思う。とにかく、何事においても力一杯やったというのが、今回の講習会の実感である。これを機に、スキーだけでなく、他のスポーツにも親しんでいきたい。

